

丸善とタイプライター

安岡孝一

丸善が、ウェリントン・タイプライターNo.2の輸入販売を開始したのは、一九〇〇年（明治三十三年）のことだった。ボストン在住のウェリントン・パーカー・キダーという発明家が、一八九二年に発明したウェリントン・タイプライターを、チャールズ・キャロル・コルビー率いるウイリアムズ・マニユファクチャリング社が改良したのが、ウェリントン・タイプライターNo.2である。『丸善百年史』下巻八三七ページで、このウェリントンを何故第二号と名付けたかと云えば、ウェリントンとはかの有名な英国の大英雄の名前であり、遠慮して第一号とつかなかったからだと言う。英国人らしいユーモアである。

と紹介しているが、これは間違い。ウェリントンという名はキダーのファースト・ネームだし、キダーはメイン州ノーリッジウォック生まれのアメリカ人だし、コルビーもバーモント州ダービー生まれのアメリカ人（ただし当時はモントリオール在住）だし、そもそも最初にウェリントン・タイプライター（図1上）があつて、それを改良したのがウェリントン・タイプライターNo.2（図1下）である。

ウェリントン・タイプライターNo.2の特徴は、スラスト・

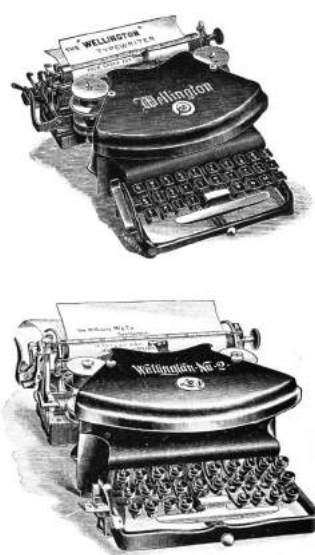


図1 ウェリントン・タイプライターと同No.2

アクションと呼ばれる、当時のタイプライターとしても珍しい印字機構にある。二八個のキーは二八本の活字棒にそれぞれ繋がっており、キーを押すと、対応する活字棒がプラテンに向かってまっすぐに飛び出す。プラテンの前面には紙が置かれており、そのさらに前にはインクリボンがあつて、まっすぐに飛び出した活字棒は紙の前面に印字をおこなう。これが、スラスト・アクションの基本動作である。活字棒の先に



図2 ローヤル・タイプライターNo.10 とコロナ3

は、それぞれ活字が三つずつ埋め込まれていて、シフト機構（ブラテンが持ち上がる）により八四種類の文字が印字可能である。ただ、複雑な印字機構のわりに、ウェリントン・タイプライターNo.2は華奢な作りで、頻繁に修理やメンテナンスを必要とした。

その後も丸善は、何種類かのタイプライターを輸入販売していたが、一九一四年（大正三年）にローヤル・タイプライター社の日本総代理店（朝鮮・満洲を含む）を獲得し、同社のタイプライターの輸入販売を大々的に開始した（二八頁参照）。主力製品のローヤル・タイプライターNo.10は、同社が前年に発売したもので、質実剛健を絵に描いたような四二キ

ーのフロントストライク式タイプライターである。金文字のROYALがキーボード奥とカット紙ガイドの二ヶ所に入っており、円弧状に配置された四二本のアームが特徴だ（図2上）。各キーを押すと、対応するアームが立ち上がって、ブラテンに置かれた紙の前面に印字がおこなわれる。アームの先には、それぞれ活字が二つずつ埋め込まれていて、シフト機構（全アームが下へ沈む）により八四種類の文字が印字可能である。

さらに丸善は、翌年、コロナ3（図2下）の販売を開始している。コロナ3は、一九一二年にスタンダード・フォールディング・タイプライター社が発売したフロントストライク式タイプライターで、セール・フレージャー社が日本での輸入代理店だったが、販売を丸善に委託したものである。タイプライター本体を小さく折りたたむのが特徴で、本体の重さが八ポンド、キャリケースが二ポンドと、旅先へも携帯可能なポータブル・タイプライターだった。二八本のアームの先には、それぞれ活字が三つずつ埋め込まれていて、シフト機構（ブラテンが持ち上がる）により八四種類の文字が印字可能である。

これら丸善が販売してきたタイプライターは、いずれも欧文タイプライターだった。一方、一九二三年（大正一二年）に仮名文字協会の山下芳太郎が、アンダーウッド・タイプライター社のバーナム・クルース・ステイックネーに横書きのカナ・タイプライターを発注し、ドッドウェル商会が輸入販売

を開始した。これを追いかけて丸善も、ローヤル・タイプライター社にカナ・タイプライターを作らせ、さらに一九二九年（昭和四年）にはカナ・ラテン・タイプライターを試作させている。

このカナ・ラテン・タイプライターは、ローヤル・タイプライターNo.10を四六キに改造した特注品で、大文字アルファベット二六種と数字八種に加え、カタカナ四六種・濁点・半濁点・記号一〇種が印字可能だった（図3）。数字の0と1は、大文字のOとIで代用する。カタカナはシフト側に配置（オを除く）されており、濁点もシフト側にあるので、カタカナを打つ場合は、通常「トメ」（シフトロック）キーを使う。オ・半濁点・長音符（ハイフン）・句読点を打つ際や、数字・アルファベット・その他の記号を打つ際は「トメ」を外す。濁点と半濁点は一文字分進んでしまうので、見映えを良くしたい場合は、直後に「モドシ」（バックスペース）キーで戻す。ただし、小文字のアルファベットも、小書きのカナも、印字できない。このカナ・ラテン・タイプライターは、東京帝国大学の緒方知三郎の求めに応じて作られたものだったが、丸善は、これを受注生産という販売形態にしたようである。

一九七五年（昭和五〇年）に丸善は、自社ブランドのタイプライターを発売した。七五年に渡るタイプライター輸入販売に一応の区切りを付け、マルゼン・ポータブルタイプライターの販売へと舵を切ったのである。ただ、マルゼン・ポー

LUNGENTUBERKULOSE A HEILBAR デアル。シム
KLINISCH ノ BEOBACHTUNG カ アチカ デアル。 BEGIN-
NENDE PHTHISE ノ SICHERE ZEICHEN A セトリ, TU-
BERKELBAZILLEN モ NACHWEISEN カル シム ヒトガ, ノ
ニ ツクテ GESUND トナリ, ヲモ DAUERND ニ GESUND ニ
BLEIBEN シテ イル シム スクタイ。 マ アナル AUSHEILUNG
ガ アナル オイ シム, ANDERE KRANKHEITEN デ STERBEN
シム ヒト ノ SEKTION ニ ツクテ, イニ TUBERKULOSE HERDE
ノ MARBE ヲ LUNGENSPIITZE ニ イデシ, マ VERKÄSTE
BRONCHIALDRÜSE ノ VERKREIDETE RESTE ヲ ミコトガ
HÄUFIG デアルコト カ アセラル。

{ MFHRING: LEHRBUCH DER INNEREN KRANK-
HEITEN. ノウチ MÜLLER ノ アシヤカ カル。 }

図3 カナ・ラテン・タイプライターの印字見本

タブルタイプライター・モデル200は、シルバー精工のシルバー・リード720に瓜二つである。ローヤル202ポータブル・タイプライターにも、瓜二つである。プラスPW72にも、瓜二つである。これらは全て、シルバー精工が製造していた。当時の広告（二八頁参照）によれば、丸善の伝統と技術が熱く息づいていたらしいのだが、さて、いったいどこで息づいていたのだろう。

（やすおか・こういち 京都大学人文科学研究所教授）

広告クロニクル

小社はその草創期から書籍だけでなくインキ・齒磨・石鹼
 などの自社製品や、いろいろな舶来品を販売していた。その
 うちのいくつかは今も継続しているが、多くは取り扱いを終
 了している。ここでは新聞紙上や小誌誌上に掲載されたさま
 ざまな広告の中から、タイプライター、万年筆、インキ、文具、
 化粧品、洋品、催事を紹介する。なお、社屋の焼失等で資料も
 十分でなく取り上げられなかった商品も多い。掲載品は小誌編
 集室がピックアップしたことをお断りする。

「學鏡」編集室

丸善の伝統と技術が熱く思っています

マルゼンポータブル タイプライター

MODEL-100.....¥22,000
 MODEL-200.....¥24,500
 MODEL-300(電動).....¥50,000
 MODEL-500(電動).....¥64,000

■格好なキータッチと鮮明な印字
 ■いつでもどこでも使える手軽さ ■充実した機能と使い良さ
 ■オフィス用にも使えるハイメカニズム(電動)
 ■現代人にマッチするスマートなデザイン

■新発売記念セール 2月末日まで

期間中、マルゼン・ポータブルタイプライターを1台お買い上げことにもれ
 なくジグソーパズル(四ドット製)を進呈
 ●お求めは最寄りの取扱店へどうぞ。

丸善本店製販部

昭和50(1975)年(p.12参照)

CORONA

THE PERSONAL WRITING MACHINE
STANDARD FOLDER MACHINE



オフィスに役行に
 家庭に到る處にタイ
 プライターの偉力
 と發揮する輕快な
 コロナ!

英文、獨文、獨文、獨文、

¥ 160.00

大正4(1915)年



大正3(1914)年 ローヤル・タイプライターNo.5・No.7・No.10 を売り
出し中の丸善大阪支店ショーウィンドー(p.11参照)

ローヤルポータブル

大型マシンの機能を完全に具備して英以上小型に作る機種の
 原料を併有する理想的ポータブル・タイプライターは唯
 ローヤルあるのみローヤル・ポータブル製造されて

タイプライターの實用能力は、歩を進め、
 其の使用の簡便は一層擴大されたと思ふ
 批評があるローヤルポータブル

の携帯は文化人の最要件

(原価¥1,500以上) 零售 各店 郵便 函索 各百二十圓



目下三遠播本目京東
 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌
 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌
 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌
 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌

札幌 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌
 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌
 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌
 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌 札幌

昭和2(1927)年